

2月25日(木)～26日(金)に行われた福島復興支援ツアーを企画・実施した学生さんから報告文が寄せられました。

特 集 被災地を訪問して (白梅学園大学 子ども学部 家族・地域支援学科3年 澤田えみ)

山路ゼミの合宿の時に、福島に行ってみようという話が出た。福島は5年前の東日本大震災により多大な被害を受けた場所である。当時見ていたテレビで、津波が町をのみ込み破壊していく光景は衝撃的だった。また家や家族を失った方々の表情に心が痛んだ。しかし現在はメディアで取り上げられることも少なくなり、過去の出来事になりつつある。私たちは、福島の現状や原発のこと、被災された方の生活や復興に向けた取り組みについて自分たちの目で見て知りたいと思った。そこで、ふくしまキッズプロジェクト in こだいらの細江卓朗さんや、NPO 法人ふるさとネットワーク福島の矢吹啓介さんなどの協力により、今回の「福島復興支援ツアー」が実現した。

ツアーには嘉悦大学と武蔵野美術大学の学生も参加し、バスは計26人を乗せて出発した。訪問場所である飯舘村は、福島第一原発の放射能汚染事故により避難を余儀なくされ、ほぼ無人化した村である。現在も除染作業は続いており、村のあちこちに大量のフレコンバッグ(*)が積んであった。震災前の飯舘村を取り戻したいという気持ちで活動している人がいる中で、5年も経つと今の生活に慣れたため村に戻りたくないという人もいる。特に若者はそう感じている人が多い。また放射能の恐怖から、被災された方だけでなく他県の人々からも危険な場所と思われており、実際は安全で美味しい地元の作物も受け入れてもらえない。被災された方の話では、たくさん傷付いたこと、もう二度とこのようなことは起きてほしくないという思いがひしひしと伝わってきた。

実際に福島に行き、福島の人の温かさに触れ、地元の美味しいご飯を食べることができたのは、福島の人々の「伝えたい」という強い気持ちがあったからだと思う。私たちはこの気持ちを汲み取り、被災された方の思いや、放射能の正しい情報、福島県産の作物の安全性・美味しさ、まだまだ支援が必要なことなどを伝えていきたい。



仮設住宅で、被災された方からお話を伺う

(*)フレコンバッグ：フレキシブルコンテナバッグの略。粉末や粒状物の荷物を保管・運搬するための袋。